

# 語彙構造と統語構造

山田 義裕

平成12年3月

# Contents

<b>1</b>	<b>語彙構造と統語構造との関係</b>	<b>1</b>
1.1	リンキング問題	1
1.1.1	UTAH と非対格の仮説	2
1.1.2	非対格性の基準	3
1.2	L&RH(1995) のリンキング論	6
<b>2</b>	<b>動作の様態動詞にみられる非対格性の交替について</b>	<b>13</b>
2.1	はじめに	13
2.2	結果の述語構文と非対格性の仮説	13
2.3	動作の様態動詞	22
2.4	Hale and Keyser (1993) の項構造の概念について	27
2.4.1	H&K(1993) の基本的仮定	28
2.5	run タイプ MMV の非対格性の交替現象再考	34
2.6	ゼロ形態素について	42
2.7	おわりに	45

# Chapter 1

## 語彙構造と統語構造との関係

### 1.1 リンキング問題

リンキングとは、述語のとる項の意味タイプとその項の現れる統語位置の関係についての一般化である。項の意味タイプとその項が現れる統語位置に規則性が見られることは広く知られている。例えば、John hit Mary という文では、John が殴る人 (Agent) で Mary が殴られる人 (Patient) という解釈を持ち、その逆ではあり得ない。これは、Agent と Patient をその項としてとる動詞に一般的に当てはまる事実である。この事実、すなわち常に Agent という意味役割が主語位置の名詞句、Patient が目的語位置の名詞句に与えられるというパターンを述べるのに用いられるのがリンキングという概念である。1980年代の生成文法の理論的枠組み（拡大標準理論 (EST)）においては、各述語の語彙構造はD構造という統語表示のレベルを介して統語という計算システムへ関係付けられると仮定されていた。それゆえ、リンキング問題はこの枠組みでは語彙構造からD構造への写像に関する条件との関わりで議論されてきた。

述語の項の意味タイプとその統語位置との関係についての提案として代表的なものに、Baker (1988) で提案されている The Uniformity of Theta Assignment Hypothesis という仮説がある。

(1.1) The Uniformity of Theta Assignment Hypothesis (UTAH)

Identical thematic relationships between items are represented by

identical structural relationships between those items at the level of D-structure.

(1) の仮説は述語の項の意味タイプとその項の基底の統語位置の関係は常に一定でなくてはならないという仮説である。つまり、項の意味タイプが与えられるとその項のD構造表示における統語位置は唯一的に (unambiguous) に決定されることになる。

### 1.1.1 UTAH と非対格の仮説

(1) のリンキングについての仮説 UTAH は、Perlmutter(1978) で提案され、その後様々な言語で経験的支持を得ている非対格の仮説の理論的基礎となり得る原則である。非対格の仮説は、自動詞は伝統的に考えられていたように統語上均質ではなく、動詞と項との (潜在的) 文法関係から大きく二つに下位分類されるという考えである。具体的にいうと、動詞のとる項がもっぱら主語として機能するタイプ (非能格動詞: unergative verbs) と、項が主語と目的語の特性を合わせ持つタイプ (非対格動詞: unaccusative verbs) である。それぞれのタイプの自動詞の代表例は (2) に示す通りである。

(1.2) Two types of intransitive verbs

- a. Unergative verbs: run, walk, laugh, ring, stink, etc.
- b. Unaccusative verbs: appear, exist, freeze, melt, arrive, etc.

非対格の仮説では、この二タイプの自動詞は統語上その基底構造が異なると考えられている。<sup>1</sup> 具体的にいうと、(3) のように、非能格動詞の場合その項は基底で主語位置にあるが、同じ自動詞であっても非対格動詞の場合はその項は基底では目的語位置にあり移動操作で表層主語位置に現れるという分析である。

(1.3) 非能格動詞と非対格動詞の基底構造

- a. 非能格動詞: NP [<sub>VP</sub> V]
- b. 非対格動詞: \_\_\_ [<sub>VP</sub> V NP]

---

<sup>1</sup> Burzio(1986) 等参照

### 1.1.2 非対格性の基準

非対格性の仮説を支持する経験的証拠は様々な言語で提出され、これら一連の現象は非対格性の基準 (unaccusative diagnostics) と呼ばれている。<sup>2</sup> 英語では次の統語現象が非対格性の基準の代表例と考えられている。

#### (1.4) *Inside verbal existential sentence*

- a. There hang a painting of his grandfather in the living room. (unaccusative)
  - b. \*There jumped a horse right at the queen's arrival. (unergative)
- cf.* There jumped a horse over the fence. (Hoekstra & Mulder (1990:34))

#### (1.5) *Locative inversion construction*

- a. Onto the ground had fallen a few leaves. (unaccusative)
- b. \*Onto the ground had spit a few sailors. (unergative)

#### (1.6) *-er Nominalization*

- a. \*appearer, \*exister, \*happener, etc. (unaccusative)
  - b. climber, rider, runner, ringer, etc. (unergative)
- cf.* newcomer, early riser, low grower (= a shrub), etc. (unaccusative)

#### (1.7) *Prenominal perfect/passive participles*

- a. a recently appeared book (unaccusative)
- b. \*a hard-worked lawyer (unergative)

#### (1.8) *Resultative construction*

- a. The river froze solid. (unaccusative)

---

<sup>2</sup> Grimshaw(1987), Levin and Rappaport(1993) 等を参照

- b. \*John ran exhausted. (unergative)
- c. \*The river itself solid. (unaccusative)
- d. John ran himself exhausted. (unergative)

(1.9) *Cognate object construction*

- a. \*She arrived a glamorous arrival. (unaccusative)
- b. Sarah smiled a charming smile. (unergative)

(1.10) *X's way construction*

- a. \*The children came their way to the party. (unaccusative)
- b. She talked her way out of the class. (unergative)

(1.11) *Prepositional passive construction*

- a. \*The desk was sat on by the lamp. (unaccusative)
- b. \*The bed was fallen on by dust (unaccusative)
- c. The desk was sat on by the gorilla. (unergative)

非対格性の仮説が主張する自動詞の非対格分析が、リンキングについて  
の一般原則である UTAH からをどのように帰結するかを見てみよう。次の  
inchoative-causative のペアを比較してみよう。

(1.12)

- a. John melted the ice cream.
- b. The ice cream melted.

the ice cream は (12) のどちらの例においても「溶ける」という状態の変化の  
対象であり Theme の意味役割をもつ。UTAH は、同じ意味役割を持つ項は  
基底で同じ統語位置になくてはならないことを要求する。(12a) の causative  
の例で the ice cream は、基底でこの位置になくてはならないことを示す統語  
上十分な理由がある。そのため、UTAH から (12b) においても the ice cream  
の基底での統語位置は動詞の補部位置ということになる。つまり、(12b) は  
(13a) の基底構造を持つ。

(1.13)

- a. \_\_\_ melted the ice cream.
- b. The ice cream melted into mash.

これは、まさに Perlmutter (1978) 以来主張されてきた自動詞の非対格分析である。このような非対格の仮説が予測する現象が何故存在するかを生成文法の EST の枠組みで理論的に説明する可能性の一つがこの UTAH という仮説なのである。

UTAH は非対格分析を予測する点で経験的に優れた仮説であり、またこれを仮定することで項構造と統語構造との関係が厳しく制限されるという点で理論上好ましい仮説である。しかし、実際の項の意味タイプとその統語位置の関係はこの仮説が予測するほど簡単 (trivial) なものではない。一例を挙げると (14) に見られる心理述語の項の意味タイプとその統語位置の関係は UTAH には大きな問題となる。

(1.14)

- a. John fears ghosts. (Experiencer: SUB, Theme: OBJ)
- b. Ghosts frighten John. (Theme: SUB, Experiencer: OBJ)

このような経験的問題に直面した時にとりうるアプローチとして、Pesetsky (1995) は三つの方向があると述べている。一つは、UTAH をあきらめることである。しかし、UTAH のような理論上も経験上も好ましい帰結を持つ仮説をすぐあきらめるのは得策ではない。UTAH を保持しながら、このような問題に対処する方法は二つある。一つは、統語論を洗練させることである。Perlmutter(1978) などの非対格性の仮説や Belletti & Rizzi(1988) の心理述語の分析などはその方向での代表例である。もう一つは、動詞の意味論を洗練させることである。このアプローチの最近の代表例として Pesetsky(1995) の心理述語の分析、そして Levin & Rappaport Hovav(以下、L&RH)(1995) の非対格性の研究などがある。問題となっている経験的事例を動詞意味論あるいは統語論を洗練させながら説明を試みる中で、リンキング問題に対する理解が深まってきている。以下では、L&RH(1995) において論じられているリンキング問題についての意味論的考察を概観する。

## 1.2 L&RH(1995)のリンクング論

リンクングとは、述語の項とその統語位置の関係についての一般化であると述べた。この一般化は、述語の意味に基づき述べることができると考えられているが、述語の意味のどの側面がリンクングのパターンを決める要因となるかについて議論が分かれている。現在、大きく分けて二つのアプローチがある。一つは、項の意味役割 (Thematic role) がリンクングにとって重要であるという考えである。もう一つは、述語 (句) の語彙的アスペクト (telicity, delimitedness) がリンクングのパターンを決めるのに決定的要因であるというアプローチである (Tenny 1988, Hoekstra 1992)。L&RHはこの二つのアプローチを批判的に検討し、どちらもリンクングの一般化をとらえるには不十分であることを指摘した。そして、多くの経験的事実に基づき述語の意味からリンクングに決定的に関係する意味成分として (15) の概念を提案している。彼女らの研究は基本的には、従来の意味役割タイプを根底から見直す作業と考えることが出来る。

(1.15)

- a. *Immediate Cause*
  - i) external cause
  - ii) internal cause
- b. *Directed Change*
  - i) change of state
  - ii) change of location
- c. *Existence*

さらに、彼女らはこれらの意味概念に基づき (16) ~ (19) のリンクング規則を仮定している。(彼女たちは、リンクングは Lexical Conceptual Structure (LCS) と Predicate Argument Structure (PAS) を結ぶ規則と考えているが、ここでは議論の便宜上基底の統語位置を決める規則と仮定して話を進める。)

(1.16) *Immediate Cause Linking Rule*

The argument of a verb that denotes the immediate cause of the eventuality described by that verb is its external argument.



(1.17) *Directed Change Linking Rule*

The argument of a verb that corresponds to the entity undergoing the directed change described by that verb is its direct internal argument.

(1.18) *Existence Linking Rules*

The argument of a verb whose existence is asserted (or denied) is its direct internal argument.

(1.19) *Default Linking Rule*

An argument of a verb that does not fall under the scope of any of the other linking rules is its direct internal argument.

(15) の意味概念と (16) ~ (19) の規則の適用例をごく簡単に見ていく。まず、Immediate Cause Linking Rule を見ていくことにする。この規則は、述語が external cause、internal cause という意味特性を持つ項をとる場合、その項は外項 (external argument) として主語位置にリンクされることを要求する規則である。external cause とは thematic approach でいう Causer のことである (例えば、*The storm* broke the window の主語 the storm)。これに対し、internal cause という概念については、項の指す対象の内的特性からある事象が生ずるときこの項が internal cause の特性を持つという。internal cause の典型は thematic approach でいう Agent である。つまり、動作動詞 (laugh, play, run) が典型的に internal cause の項をとる。例えば、John laughed. という文で John が笑うという事象は John の内的特性から生じており、John はその事象を引き起こす internal cause となっているという。では何故、agent ではなく、それを含むより広い概念である internal cause という概念が必要なのか。Agent は比喩的文脈を除くと、常に animate な対象に与えられる意味役割である。しかし、inanimate な要素が (noncauser なのに) 外項となる場合がある。代表的な例は、verbs of emission (音・光・におい等がでるという意味の動詞) である。

(1.20)

- a. The phone rang.

- b. The phone rang me out of a dreamless oblivion at seven-fifteen.  
(L&RH 1995: 138)

例えば、(20) の ring は (20b) のように非能格型の結果の述語構文を取ることから分かるように非能格動詞でその項 the phone は基底で主語位置になくなくてはならない。しかし、the phone は、もちろん causer ではないし、また inanimate のため Agent でもあり得ない。それ故、このタイプの動詞の項の主語位置へのリンクを述べるためには、この二つの概念では不十分である。このことから、L&RH は internal cause という Agent 含むより広い概念が外項のリンクに必要と論じている。

(17) の Directed Change Linking rule は、動詞がある方向への変化を示す場合、変化を受ける対象は内項として統語上具現することを述べた規則である。このタイプの項をとる動詞は、場所の変化を示すもの (fall, come, arrive, etc) と状態の変化を示す動詞 (break, melt, freeze, etc.) がある。(21) から分かるように、どちらの動詞の場合も変化を受ける対象、Thematic approach の Theme に相当する項は、基底で動詞の補部位置になくなくてはならない。そのため、(21) から分かるように、これらの動詞は統語的に典型的非対格動詞の特性を示す。<sup>3</sup>

(1.21)

- a. Down the stairs fell the baby.  
b. The vase broke into pieces.  
c. \*The apples fell a smooth fall.  
d. \*The mirror broke a jagged break.

(18) の Existence Linking rule は、verbs of existence (be, exist, remain, etc.), verbs of appearance (appear, occur, etc.), verbs of spacial configuration (sit stand, lie, hung, etc.) がとる項に適用し、これらの項を内項として補部位置にリンクする規則である。これらの動詞が (22) に示すとおり非対格動詞の特性を示すことが、この規則の経験的証拠である。

---

<sup>3</sup> (21a) のように locative inversion が可能なこと、(21b) のように目的語なしの結果の述語構文に現れること、(21c,d) のように同族目的語構文を取れないことは非対格動詞の典型的特性である

(1.22)

- a. In front of her appeared a fabulous sight. (verbs of appearance)
- b. In the desert fourished a utopian community. (verbs of existence)
- c. On the corner was standing a woman. (verbs of spacial configuration)

(19) の Default Linking Rule は項が (15) 以外の意味特性を持つ場合、その項を内項として統語構造にリンクする規則である。

L&RH のリンク理論で面白いのは、彼女たちは単に今述べたリンク規則のリストを作るだけでなく、それぞれのリンク規則が他のリンク規則と互いにどのように関係し合うか、つまりリンク規則間の interaction を考えることで述語の意味と統語構造の複雑な関係を明らかにしようと試みている点である。これまで見てきたリンク規則の適用例では、動詞の項は全て (15) の意味特性のうちどれか一つにより (uniquely に) 特徴づけられていた。しかし、一つの項が、リンクに関わる意味特性を同時に二つ持つ場合があることが L&RH で指摘されている。このうち、項のリンクに関して問題となるのは、項が外項の意味特性である immediate cause と内項の意味特性である Directed Change/Existence を同時に持つ場合である。

彼女らは、リンク規則の interaction の例として sit, stand のような verbs of spacial configuration の統語上の振る舞いに注目している。彼女らは、このタイプの動詞は次の三つの意味を持つと指摘している。

(1.23)

- a. *simple position (with inanimate subject)*  
The statue stood in the corner.
- b. *maintain position (with animate subject)*  
John stood alone in the hallway for six hours.
- c. *assume position (with animate subject)*  
John stood up on the platform.

そして、このタイプの動詞が maintain position と assume position の読みを持つ場合、非対格性に関して異なることを指摘している。この証拠として、彼女たちは prepositional passive の可能性に基づく議論を行っている。prepositional passive は Perlmutter and Postal (1984) によると非能格動詞にのみ可能な操作である。<sup>4</sup> この二つの読みに関して prepositional passive によるテストをすると、(24) のコントラストが得られる。

(1.24)

- a. This platform has been stood on by an ex-president. (maintain position)
- b. \*This platform has been stood up on by an ex-president. (assume position)
- cf. The desk was sat on by the gorilla/\*the lamp.

stand は maintain position, assume position どちらの場合でもその項（主語名詞句 John）は Agent の読みを持ち、どちらも非能格動詞となるはずである。にもかかわらず、assume position の場合は、simple position の場合と同様非対格の特性を持つ。この事実を説明するため、L&RH は stand が assume position の読みを持つときその項が Agent と同時に Theme(Directed Change) と解釈されることに注目し、リンクング規則に次の precedence を仮定している。

(1.25) Directed Change Linking Rule → Immediate Cause Linking Rule

(25) は、動詞の項が immediate cause と Directed Change 両方の意味特性を持つ場合、Directed Change Linking Rule を優先的に適用せよというものである。このリンクング規則の precedence を仮定すると、(24b) の an ex-president は Agent の読みを持つてはいるが、統語上は Directed Change Linking Rule により補部位置にリンクされ、その結果この文は非対格動詞の振る舞いを示すことが説明される。

L&RH におけるリンクング規則間の相互関係の議論は、述語がその項に対し二つの意味関係を inherent に持つ場合が殆どである。(assume position

---

<sup>4</sup> Pesetsky (1995) も参照

の stand は内的特性としてその項と Agent, Theme 両方の意味関係を持つ) しかし、これとは別に述語の項が文中に現れた他の述語要素との関係で二つの意味を持つようになるケースがある。例えば、run タイプの動詞が方向の表現をとるとき、その項は Agent と Theme 両方の読みを持つ。

(1.26)

- a. John ran into the room.
- b. John jumped into the river.

(26) の場合も表層主語 John は Agent でありかつ場所の変化を受ける対象 (Theme) である。(25) の precedence を仮定すると、この項には immediate Cause Linking rule ではなく、Directed Change Linking Rule が適用し結果的に (26) は非対格構文となるはずである。run-type の動詞が方向の表現を伴う場合非対格動詞の振る舞いを示すことは、Van Valin (1987), Fukuda (1990), L&RH(1991) 等何人かの研究者が指摘している。run タイプの動詞は本来非能格動詞だが、方向の表現を伴うと次の例のように典型的非対格動詞の振る舞いを示す。

(1.27)

- a. Into the room ran John.
- b. Down from the tree jumped a cat.

この事実も、(25) のリンク規則の interaction を仮定することで同様な説明が可能と思われる。しかし、L&RH はこのタイプの非対格性の変化をリンク規則の Precedence で説明するのではなく、これらの動詞が Lexical rule を受けることでその非対格性を変えるためだと分析している。(25) により説明する可能性について彼女たちは議論していないが、この分析の考えられうる経験的反例として (28) の事実があげられる。

(1.28)

- a. \*John ran exhausted.
- b. \*John ran out of breath.
- cf.* John ran himself exhausted.

(28)の結果の述語構文でも John は Agent と Theme (状態の変化)の両方の意味を持つ。そのため、(25)がこの例のリンクングを決めているとするとこの項は Directed Change Linking rule を受け、run は非対格動詞の振る舞いを示すはずである。しかし、事実は違う。(28)の run は直接結果の述語をとれないことから非能格動詞である。(26)と(28)のコントラストで重要なのは John の受ける変化が場所の変化か状態の変化かで動詞の非対格性が異なっている点である。この違いを説明するのに、L&RH は run タイプの動詞が場所の変化を示す表現と共起した時のみに適用する語彙規則 (非能格 → 非対格)が必要だと主張している。場所の変化と状態の変化の違いが run タイプの動詞の非対格性の交代についての決定的要因であることは(25)の例から分かる。L&RH が指摘しているように、同じ結果の述語でも、(28)のように状態の変化ではなく場所の変化を示している場合は、(29)が示すように run は非能格動詞から非対格動詞へと交代している。

(1.29)

- a. John ran/jumped clear of the car.
- b. \*John ran/jumped into a frenzy.

同じ Directed Change でも場所の変化と状態の変化では動詞の非対格性の交代に関して重要な違いがあるという L&RH の指摘は極めて興味深く妥当なものと思われるが、この特性が lexical rule のなかで述べられなくてはならない a priori な理由はない。次の章では、この現象を Pesetsky (1995) で議論されているゼロ形態素が関わる交替現象として位置付け L&RH の分析の代案を検討する。

## Chapter 2

# 動作の様態動詞にみられる非対格性の交替について

### 2.1 はじめに

文の基本的統語特性は、その文が含む述語の特性に基づき決定されるという考えがある。例えば、1980年代の生成文法で仮定されていた投射の原理 (the Projection Principle) はこの考えを明示的に述べたものである。述語のなかでも特に動詞について、Perlmutter(1978) 以来、「非対格性の仮説 (the Unaccusativity Hypothesis)」という自動詞の類型に関する非常に興味深い一般化が仮定されている。この章では、L&RH (1992, 1995) 等で論じられている動作の様態の動詞 (verbs of manner of motion) に見られる非対格性の交替の現象を、Hale and Keyser (1993) で提案されている項構造 (Argument Structure) についての理論的枠組みの中で考察する。

### 2.2 結果の述語構文と非対格性の仮説

非対格性の仮説は、自動詞はその意味及び統語上の特性により非能格動詞 (unergative verbs) と非対格動詞 (unaccusative verbs) という二つの範疇に分類されるという考えである。意味的観点から分類する場合、非能格動詞の典型は laugh, run のような動作を示す自動詞で、一方非対格動詞は freeze, break のように状態の変化を示すものがその典型と考えられている。Burzio

(1986) は、この二つの自動詞は基底構造において異なると仮定し、動詞の非対格性は統語に反映されると主張している。具体的にいうと、非能格動詞の場合その項は基底で主語位置にあるが、同じ自動詞であっても非対格動詞の場合はその項は基底では目的語位置にあり移動操作で表層主語位置に現れるという分析である。

#### (2.1) 非能格動詞と非対格動詞の基底構造

- a. 非能格動詞: NP [  $VP$  V ]
- b. 非対格動詞: \_\_ [  $VP$  V NP ]

この仮説を支持する経験的証拠は様々な言語で提出され、これら一連の現象は非対格性の基準 ( unaccusative diagnostics ) と呼ばれている ( Grimshaw 1987, L&RH 1993 等を参照 )。<sup>1</sup> 中でも結果の述語構文はこの仮説を支持する強い証拠と考えられている。

英語を初め多くの言語で形容詞句あるいは前置詞句が「結果の述語 ( resultative predicates ) 」として解釈される場合がある。(2)、(3) を見てみよう。

#### (2.2)

- a. John painted the wall red.
- b. I broke the window into pieces.

#### (2.3)

- a. 太郎は壁を 赤く 塗った。
- b. 私は窓を 粉々に 割った。

下線部の述語が結果の述語の例である。結果の述語の分類上の基準は意味的なものである。(2) 及び (3) の各々の例で、下線部の述語は、動詞が示す行為により影響を受けた要素の結果の状態を示している。例えば、(2a) では述語 ( red ) は「塗る」という行為により影響を受ける要素 ( the wall ) の結果の状態を示している。このように、意味上文中の要素の結果の状態を示す述語を

---

<sup>1</sup> 英語では Locative Inversion construction, *-er* Nominalization, Prenominal perfect/passive participles, *X's way* construction などがその代表例である。



総称して結果の述語と呼ぶ。結果の述語は, Rothstein(1983) で議論されているように、(4) の「描写の述語 (depictive predicates)」と統語上同じ二次述語 (secondary predicates) と分析できるが、結果の述語は描写の述語にはない興味深い特性を持つことが Simpson(1983)、Rothstein(1983) などで指摘されている。描写の述語は (4) のように文中の主語位置にある名詞句でも目的語位置の名詞句でもどちらとも主述関係を持つことができるが、一方 (5)、(6) の対比が示すように結果の述語は常に目的語位置の名詞句と主述関係を持たなくてはならない。

(2.4)

- a. John ate the meat<sub>i</sub> raw<sub>i</sub>.
- b. John<sub>i</sub> ate the meat naked<sub>i</sub>.

(2.5)

- a. John painted the wall<sub>i</sub> red<sub>i</sub>.
- b. 太郎は壁を<sub>i</sub> 赤く<sub>i</sub> ぬった。

(2.6)

- a. \*John<sub>i</sub> painted the wall exhausted<sub>i</sub>.
- b. \*太郎は<sub>i</sub> 壁をくたくたに<sub>i</sub> ぬった。

(5) ~ (6) の対比から結果述語はその叙述対象が目的語でなくてはならないという目的語指向性があることが分かる。次に (7) を見てみよう。

(2.7)

- a. The wall was painted red.
- b. Which wall did John paint red?

(7) では、結果の述語の意味上の主語が表面上目的語位置にないにも拘わらず適格である。しかし、不適格な (6) の例と異なり、(7) では結果の述語の叙述の対象である the wall/which wall は動詞 paint の意味上の目的語である。(7) の現象が示しているのは、結果の述語の叙述条件で重要なのは叙述の対象の表層位置ではなく、その基底位置なのだということである。(7) の現象を考慮に入れると、結果の述語の目的語指向性は (8) として述べられる。

(2.8) 結果の述語の目的語指向性の条件結果の述語は基底構造で目的語位置にある名詞句と主述関係を持つ必要がある。<sup>2</sup>

(8) の結果の述語の目的語指向性は、文の基底構造を探る上で非常に有用な手段となる。つまり、文中の名詞句の基底での統語位置（その名詞句が基底で主語か目的語か）を結果の述語による叙述の可能性に基づいてテストすることができる。

ここで、非対格性の仮説を思い出してみよう。非対格性の仮説は、自動詞は統語上均質ではなく、動詞とその項との基底での文法関係に基づき (1) で示すように統語上二つに分類されるというものであった。それぞれのタイプの自動詞と結果の述語との共起可能性についての事実がこの仮説を強く支持することをみていく。<sup>3</sup>

非対格性の仮説では、(9) のそれぞれの自動詞構文は (10) の異なる構造を持つ。

(2.9)

- a. John laughed. (laugh: unergative)
- b. The river froze. (freeze: unaccusative)

(2.10)

- a. John [<sub>VP</sub> laughed]
- b. The river<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> froze t<sub>i</sub>]

(8) で述べたように結果の述語は基底で目的語位置にある名詞句と主述関係になくなくてはならないという特性をもつ。非対格性の仮説では、非能格動詞の項は基底で主語位置にあり、一方非対格動詞の項は基底では目的語である。それ故、この仮説が正しいとすると二つの自動詞構文は結果の述語との共起可能性が異なることが予測される。(11a,b) と (11c,d) を比較してみよう。

<sup>2</sup> (8) は Simpson(1983) で述べられている一般化である。より正確には、L&RH(1995) で述べられているように、動詞の直接目的語との叙述関係が必要である (Direct Object Restriction)。 (i) のように、結果の述語は前置詞の目的語を叙述できない。

i) \*John shot at Mary dead.

<sup>3</sup> 以下の議論について、詳細は Burzio (1986), L&RH(1993, 1995) 等を参照。

(2.11)

- a. \*John laughed sick.
- b. \*John ran exhausted.
- c. The river froze solid.
- d. The vase broke into little pieces.

非対格性の仮説が予測するとおり、非能格動詞 (laugh, run) は (11a, b) が示すように結果の述語と共起できないが、非対格動詞 (freeze, break) の場合その項は結果の述語による叙述が可能となる。これは、非対格動詞の表層主語は、非能格動詞の主語とは異なり、基底で目的語位置にあり結果の述語の目的語指向性と矛盾しないためである。このように、結果の述語との共起可能性に関する事実 (11) は非対格性の仮説を支持する証拠となる。

自動詞構文における結果の述語の振る舞いに関してもう一つ興味深い事実が観察されている。英語では、(12a, b) の非能格動詞の構文でも、その目的語位置に再帰代名詞を置くことで結果の述語が可能となる。

(2.12)

- a. John laughed himself sick.
- b. John ran himself exhausted.

(12) では結果の述語は、主語の John とではなく目的語位置の再帰代名詞 himself と主述関係を持つことで (8) の適格条件を満たしている。この構文の目的語位置に現れる名詞句は再帰代名詞に限られないことが Randall(1983) を初め多くの人が指摘している。<sup>4</sup>

(2.13)

- a. We laughed John out of the room.
- b. The clock ticked the baby awake.
- c. The joggers ran their Nikes threadbare. (Carrier and Randall 1992:173)

---

<sup>4</sup> このタイプの結果の構文の特性については、他に Carrier and Randall (1992)、L&RH (1993, 1995)、Yamada (1984) を参照。

(12)、(13)の動詞の後の名詞句が統語上目的語位置にあるというのは、これらの文に現れている動詞が自動詞であることを考えると、不自然に思えるかもしれない。実際、(12)、(13)の文の動詞が結果の述語を伴わず名詞句のみをとることは(14)が示すとおり不可能である。

(2.14)

- a. \*John laughed himself.
- b. \*The clock ticked the baby.

しかし、これらの名詞句が結果の構文では統語上（例えば付加語などではなく）目的語として機能していることは(15)のように受動化が可能なることから明らかである。

(2.15)

- a. John was laughed out of the room.
- b. The baby was ticked awake by the loud clock. (Levin and Rappaport 1995:44)

(12)、(13)の構文は他動詞の結果の構文と表面上似ているが、基本的な点で異なっている。他動詞の結果の構文の場合は目的語は動詞と何らかの意味関係を持っている。例えば、John painted the wall red では、目的語の the wall は動詞 paint から塗られる対象 Patient という意味役割を受けている。しかし、Carrier and Randall(1992)を初め多くの研究者が指摘しているように、(12)、(13)の非能格動詞の結果の構文では目的語は動詞と直接意味的な関係はない。この点で(12)、(13)は他動詞の結果の述語構文とは異なると考えられており、それ故結果の述語構文は一般に次の三つに分類されるのが普通である。

(2.16)

a. *the transitive resultative construction*

John painted the wall red.

b. *the unaccusative resultative construction*

The river froze solid.

c. *the unergative resultative construction*

John laughed himself sick.

次に、非対格動詞及び非能格動詞の結果の述語構文に焦点をあて、この二つの自動詞構文の統語上の振る舞いの違いが、非対格性の仮説と密接に関連した仮説である (17) の Burzio の一般化 (Burzio's generalization) を支持する証拠となることを述べていく。

(2.17) Burzio の一般化

動詞が対格を付与するのはその動詞が外項をとる場合で、しかもその場合に限られる (動詞が外項をとることがその動詞が対格付与能力をもつ必要十分条件)。

Burzio の仮説で面白いのは、この仮説はたとえ自動詞であっても外項をとっていさえすれば動詞は潜在的に対格付与能力を持つという予測を行う点である。非対格性の仮説を仮定すると、Burzio の一般化は自動詞の対格付与能力について次の予測をする。

(2.18)

a. 非能格動詞は対格を付与する能力をもつ

b. 非対格動詞は対格を付与する能力をもたない

非対格性の仮説から、非能格動詞の項は基底で主語位置に具現する外項であるが、一方非対格動詞の場合その項は基底では動詞の補部位置に現れるため内項となる。それ故、Burzio の一般化によると、この二つのタイプの自動詞は (18) のように潜在的対格付与能力において異なっていることになる。Burzio は虚辞目的語 (expletive object) との共起についてのコントラストを彼の一般化を支持する証拠として提示している。

(2.19)

- a. John smiled his head off.
- b. \*They arrived the hell out of the bus terminal.

虚辞目的語は (19a) の非能格動詞の目的語として現れることはできるが、これに対し非対格動詞はこの構文をとることはできない。このコントラストは、この二つの自動詞の対格付与能力の違い (18) を仮定することで説明できる。(19a) の smile は非能格動詞であり対格付与能力を持っているため虚辞目的語は適切に格付与され適格文となるが、一方 (19b) では arrive は非対格動詞のために虚辞目的語に格を付与できない。虚辞目的語はこの統語環境では他に格を受ける手段がないため、格フィルター違反で不適格となる。このように、Burzio の一般化を仮定することで、(19) のコントラストは格理論で自然な説明が可能となる。

更に、Burzio の一般化を支持する経験的証拠として、この二つのタイプの動詞の同族目的語との共起可能性についての事実がある。Keyser and Roeper(1984) は、自動詞の同族目的語との共起可能性が非対格動詞と非能格動詞で異なることを指摘している。(20) と (21) を比較してみよう。

(2.20)

- a. He smiled a strange smile.
- b. He ran a good run.

(2.21)

- a. \*The ship sank a strange sinking.
- b. \*He emerged a strange emergence.

同族目的語は (20) の非能格動詞の後に現れることはできるが、これに対し非対格動詞はこの構文をとることはできない。このコントラストも (19) と全く同様 Burzio の一般化を仮定することで、格フィルターにより説明される。

二つのタイプの自動詞がとる結果の述語構文の違いが、Burzio の一般化を支持する更なる経験的証拠を与えてくれることを示す。<sup>5</sup> 非対格動詞と非

---

<sup>5</sup> 以下の議論については L&RH (1993, 1995)、Yamada (1984) を参照。

能格動詞は、前に示したように、結果の述語との共起可能性に違いがある。非対格動詞は結果の述語をそのままの形でとることができるが、一方非能格動詞は目的語を伴わない限り結果の述語と共起できない。つまり、この二つの自動詞は結果の構文に関して (22)、(23) のコントラストを示す。

(2.22)

- a. The prisoners froze to death. (L&RH 1995:39)
- b. The bottle broke open.

(2.23)

- a. \*John shouted hoarse.
- b. \*Mary laughed sick.  
*cf.* Mary laughed herself sick.

このコントラストは、前に議論したように非対格性の仮説を仮定することで結果の述語の目的語指向性の条件から説明される。非能格動詞と非対格動詞にはもう一つ面白いコントラストが見られる。(24) と (25) を比べてみよう。

(2.24)

- a. Mary shouted herself hoarse.
- b. I ran the soles off my shoes.

(2.25)

- a. \*The river froze itself solid.
- b. \*The cart rolled the rubber off its wheels. (Levin & Rappaport 1988: 323)  
(=“The cart rolled, and as a result it caused the rubber to come off its wheels”)

非能格動詞の結果の述語構文では、(24) のように結果の述語が統語上叙述可能な目的語位置に名詞句が必要であった。しかし、面白いことに非対格動詞はこの構造をとると (25) のように不適格となる。このコントラストも、Burzio

の一般化が正しいとすると、虚辞目的語 や同族目的語との共起可能性についてのコントラストと全く同様に格理論から自然に帰結する。つまり、格付与能力をもつ自動詞は非能格動詞のみのため、(25)のように非対格動詞は目的語をとっても格が付与されず格フィルター違反となる。

非対格性の研究では、これまで結果の述語構文における(22)と(23)、(24)と(25)が示すコントラストが非対格性の仮説及び Burzio の一般化を支持する経験的証拠として決定的な現象と考えられてきた。しかし、非対格性の基準 (unaccusative diagnostics) に照らし非能格動詞と分類される動詞で、結果の述語構文での振る舞いが非能格動詞のパラダイムとは逆のパターン (非対格動詞のパターン) を示すものがあることが L&RH(1995) で指摘されている。具体的にいうと、動作の様態を示す run タイプの動詞がその一例である。次の節では、このタイプの動詞が結果の述語構文で示す独特の振る舞いについての L&RH(1995) の興味深い観察を紹介し、それについての彼女らの分析を検討する。

### 2.3 動作の様態動詞

Levin(1993)、L&RH(1991,1995) では意味上「動作の様態の動詞」(manner of motion verbs、以下 MMV と略記) と分類される動詞に run タイプと roll タイプの二つを仮定している。この節では、run タイプの動作の様態の動詞の結果の述語構文での振る舞いに焦点をあて考察する。

この run タイプ MMV は、いくつかの非対格性の基準に照らし通例非能格動詞と分類されている。例えば、(26) が示すとおり非対格動詞には不可能とされる *-er* Nominalization が可能であり、逆に非対格動詞に典型的にみられる Locative Inversion の構文をとることができない。<sup>6</sup>

---

<sup>6</sup> 他にも (i) のように同族目的語をとることができる、あるいは (ii) のように prenominal past participle として用いられないことなどもこのタイプの動詞が非能格動詞であることを示す証拠として用いられる。

i) John walked a long walk. (Fukuda 1990)

ii) \* a recently walked boy



(2.26)

- a. runner/walker/jumper/etc.  
*cf.* \*appearer/\*exister/\*dier/etc.<sup>7</sup>
- b. \*In the room ran a shrieking child. (L&RH 1991: 259)
- c. \*On the table jumped a cat. (Levin 1993:93)  
*cf.* In the wood lives an old man.

また、結果の述語構文に現れる場合も (27) のように非能格動詞型の構文をとる。

(2.27)

- a. We walked ourselves into a state of exhaustion.
- b. \*We walked into a state of exhaustion.
- c. Tom ran the soles off his shoes. (Levin 1993:266)

しかし、このタイプの動詞はある種の結果の述語を伴った場合、(28) が示すように典型的非対格動詞の特性を示すという興味深い事実が L&RH(1995) で観察されている。<sup>8</sup>

(2.28)

- a. John ran clear of the car.
- b. They slowly swam apart.
- c. You must jump clear of the vehicle.

---

<sup>7</sup> unaccusative verbs でも causative の形を持つものは、もちろん *-er* Nominalization は可能である。

opener, drier, freezer, etc.

<sup>8</sup> さらに、この非対格性交替の現象は run タイプ MMV だけでなく click, clank, thud などある種の音放出の動詞 (sound emission verbs) に観察されることが L&RH(1995) で議論されている。

i) The lid of the boiler clanked shut. (L&RH 1995:191)

- d. \*John ran himself clear of the car.
- e. \*They swam themselves apart.
- f. \*You must jump yourself clear of the vehicle.

(28) の現象とは独立に、run タイプ MMV が方向を示す表現をとる場合、非対格性が変化するという非対格性の交替の現象が存在することが Van Valin (1987)、Fukuda (1990)、Levin (1993)、L&RH (1991,1995) で議論されている。<sup>9</sup> 方向の前置詞句をとった場合、run タイプ MMV は非対格動詞に特有の統語環境で現れる。(29) の locative inversion のコントラストがこのことを示している。

(2.29)

- a. \*In the room ran a shrieking child.
- b. Into the room ran a shrieking child.

もう一つ興味深い事実として、L&RH は run タイプ MMV の使役交替 (causative alternation) の現象を提示している。非能格動詞は非対格動詞と異なり (30) が示すように使役交替を示さず、run タイプ MMV も (31) のようにこの点では非能格動詞の振る舞いを示す。

(2.30)

- a. \*The clown laughed the child. (i.e., got the child to laugh)
- b. \*The alfalfa sneezed the colt. (i.e., made the colt sneeze)
- c. The storm cleared the air.
- d. The cook thinned the gravy. (H&K 1993:73-75)

(2.31)

- a. \*We ran the mouse.
- b. \*The coach jogged the runners all day.

---

<sup>9</sup> run タイプ MMV が方向の句を取る場合、そのアスペクトが Vendler (1967) の意味での activity から accomplishment へ変化する指摘はかなり前から指摘されている。Dowty (1979) 等を参照。

c. ??The general marched the soldiers. <sup>10</sup> (L&RH 1995:156, 188)

しかし、run タイプ MMV が方向の前置詞句を伴っている場合は、使役交替が可能となることが (32) から分かる。

(2.32)

- a. We ran the mouse through the maze.
- b. The general marched the soldiers to the tents.

(31) と (32) のコントラストは (29) の locative inversion の現象にみられるコントラストと同様、run タイプ MMV は方向の前置詞句をとると非対格性が変化することを示している。この run タイプ MMV の特性を便宜上 (33) として述べておく。

(2.33) run タイプ MMV の非対格性についての一般化 1

run タイプ MMV は方向の前置詞句を補部としてとる場合非対格性が非能格から非対格へと変化する。

ここで、(28) で示した結果の述語構文における run タイプ MMV の振る舞いを再び考える。run タイプ MMV を含む通常の結果の述語構文 (34) と L&RH (1995) で観察されたデータ (35) を比較してみよう。

(2.34)

- a. \*John ran exhausted.
- b. John ran himself exhausted.

(2.35)

- a. John ran clear of the car.
- b. \*John ran himself clear of the car.

---

<sup>10</sup> The rider jumped the horse. のように使役化が可能な場合の説明については Levin (1993:31)、L&RH(1995:188) 参照。

(34) では run タイプ MMV は非能格動詞に典型的な振る舞いをしているが、(35) では非対格動詞の特性を示している。L&RH(1995) は (34) と (35) のコントラストを説明するのに結果の述語自体の意味特性に着目し、(33) の一般化をこれらの事例を含むよう拡張することを提案している。彼女らの基本的考えは、run タイプ MMV の非対格性の交替は従来議論されていたように「方向の前置詞句」をとるかどうかではなく、「場所の変化」(a change of location) の表現を補部としてとるかどうかが決定的要因であるというものである。この彼女らの主張は (36) とまとめられる。

#### (2.36) run タイプ MMV の非対格性についての一般化 2

run タイプ MMV は場所変化の表現を補部としてとる場合、非対格性が非能格から非対格へと変化する。

(34) と (35) の結果の述語は前者 (exhausted) は状態の変化、後者 (clear of the car) は場所の変化を示している点で意味上異なっている。そのため (34) では run タイプ MMV は能格動詞のままであるが、一方 (35) の文では run タイプ MMV は場所の変化の述語をとっているため、方向の副詞を取る場合と同様、(36) により非対格動詞へ変化しているのである。

さらに、L&RH(1995) では明言されてはいないが、run タイプ MMV の補部選択について二つの用法で違いが見られる。非能格用法の場合は補部の選択は随意的だが、一方非対格用法の場合は必ず「場所変化」の補部が選択されている必要がある ((John ran (himself exhausted)./ We ran the mouse \*(through the maze))。)

(36) の非対格性の交替は run タイプ MMV のみならず click, clutter のようなある種の音放出の動詞 (verbs of sound emission) などにも広くみられる一般的現象であり、この裏に動詞統語論 (verb syntax) や語彙意味論 (lexical semantics) に関するなんらかの原則が潜んでいるように思われる。L&RH(1995) では、run タイプ MMV の非対格性の交替は基本的意味 (manner of motion) から派生的意味 (directed motion) への意味変化に起因すると考え、この意味変化の現象にある種の語彙規則が関与していると論じている。この種の意味変化の現象を語彙規則で説明する動機として、この現象に次の三つの特徴が見られるからだとして主張している。まず、この現象が生産的なものであること、次に run タイプ MMV などあるクラスの動詞に限られるという制限が同時に存在すること、さらにこの現象の存在が言語により異なることを特徴

としてあげ、ある種の英語特有の語彙規則が関わっていると主張している。

11 12

この章ではこの非対格性交替の現象が辞書内の語彙プロセスではなく統語プロセスであるという立場に立ち、Hale and Keyser (以下 H&K) (1993) で提案されている項構造 (argument structure) の分析の基本的枠組みの中で論じていく。

## 2.4 Hale and Keyser (1993) の項構造の概念について

H&K(1993) の項構造についての提案の最も基本となる考えは、項構造はその内部構造上の特性も構造変化のプロセスも統語の原則に従うという意味で完全に統語的実体 (syntactic object) であるという主張である。彼らはこの意味での項構造を語彙関係構造 (lexical relational structure、以下 LRS) と呼んでいる。この立場をとると、これまで見てきた現象を初めとする交替 (lexical alternation) 現象も当然統語的プロセスと考えることになる。これは、L&RH(1993) を初めとする、項構造を各述語の語彙特性と考え交替現象を統語とは別のある種の辞書内の語彙的プロセスと考えるアプローチとは対極をなす考えである。この節では H&K(1993) の項構造についての基本的考えを概観する。

---

<sup>11</sup> この種の意味変化を示す動詞は、上で示した run タイプ MMV、verbs of sound emission のほかに verbs of body-internal motion (flap)、また他動詞では verbs of contact through motion (rub) がある。詳しくは L&RH(1995:204) 及び Levin(1993:105) 参照。

<sup>12</sup> L&RH(1995:197) を参照。L&RH(1995) ではどのような語彙規則を念頭に置いているかは明言してはいない。L&RH(1992) 等では run タイプ MMV の二つの意味を語彙従属 (lexical subordination) で関連させる提案を行っている。この語彙プロセスにより非能格用法の run の意味表示 (i) は (ii) の表示となる。

- i) [x MOVE in-a-running-manner] (run: manner of motion)
- ii) [GO TO y BY [x MOVE in-a-running-manner]] (run: directional)

### 2.4.1 H&K(1993)の基本的仮定

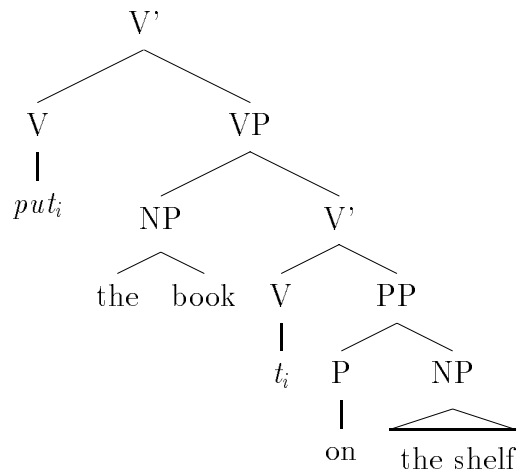
H&K(1993)は、動詞を初めとする述語主要部 (predicative head) の項構造は単にそれが選択する項タイプ (あるいは 役割のタイプ) のリストではなく、LRS という内部構造をもつ表示である仮定している。彼らの項構造分析の枠組みでは、LRS は統語表示の特性を持ち、表示内の要素間の構造関係も構造変化のプロセスも統語の原理に従う。<sup>13</sup> 彼らの LRS についての基本的考えを名詞派生型の動詞 (denominal verbs、以下 denom-V) の LRS 表示及びその派生を例に示していく。

(37a-c) のような場所の denom-V は基本的に (38) の put をその主要部とする動詞句と平行した内部構造の LRS をもち、denom-V の派生は名詞主要部の上位の動詞位置への主要部移動によると仮定している。

(2.37)

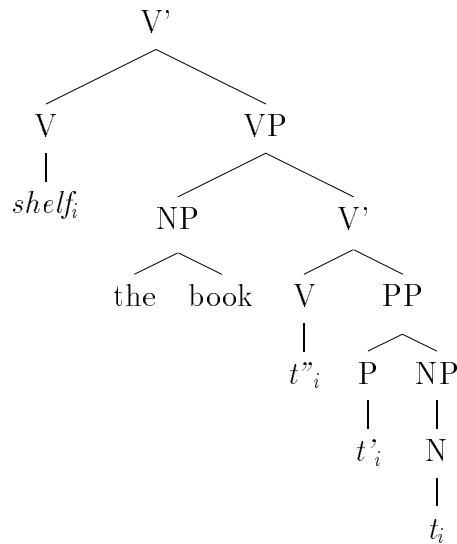
- a. John shelved the book.
- b. Mary boxed the apple.
- c. Sam corralled the horses.
- d. John put the book on the shelf.

(2.38)



<sup>13</sup> H&K は LRS は統語特性を持つと主張しているが、LRS は D 構造の入力となる辞書レベルの表示と仮定している。LRS が D 構造以降の統語プロセスに「見える」かどうかについては、彼らは態度を明確にしていない。語形成など語内部でのプロセスも辞書ではなく計算システムである統語レベルのプロセスと考えるべきであるという強い立場については、Marantz(1997) を参照。

(2.39)



彼らの分析では *shelve* という denom-V は (39) の LRS 表示を持つ。この表示の要素間の構造上の関係は統語構造を規定する原理 (X' 理論や unambiguous projection の原則) により規定され、派生も統語で適用されるのと全く同じ操作 (この場合主要部移動) による。彼らはこの LRS を仮定する経験的証拠をいくつか提示している。denom-V が主要部移動により統語的に派生されたものであることを示すには、(39) の派生に統語の原理がはたらいしているという経験的証拠を示せばよい。主要部移動は主要部移動制約 (the Head Movement Constraint, cf. Travis 1984) という局所性の制約に従うことが分かっている。<sup>14</sup> これは直感的にはある主要部 X を移動する場合に別の主要部 Y を越えて動かすことはできないという制約である。この制約が実際 denom-V の派生を制限している経験的証拠を三つ提示しているが、その一つ (40) を見ていくことにする。

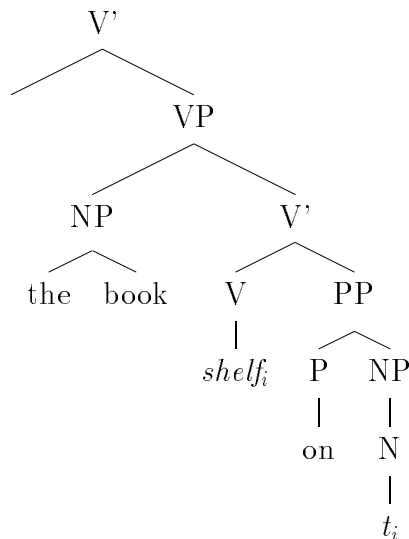
<sup>14</sup> この制約がどのような UG の原理から帰結するかは、理論の変遷に伴い考えが変わってきている。GB 理論の枠組みではこの制約を空範疇原理から導き出す方向で議論されていた (Baker 1988, Chomsky 1991, etc.) が、Rizzi (1989) の相対的最小性による分析を経て、現在の極小主義のプログラムではこの制約には派生の経済性の原理が決定的に関わっていると議論されている。この章の議論では、主要部をとり越えての主要部移動は許されないという記述的一般化としてとらえておくだけで十分である。

(2.40)

- a. \*She shelved the books on.  
(*cf.* He put the books on a shelf. He shelved the books.)
- b. \*He bottled the wine in.  
(*cf.* He put the wine in the bottles. He bottled the wine.)
- c. \*He corralled the horses in.  
(*cf.* He put the horses in a corral. He corralled the horses.)

英語の動詞は小辞 (particle) とペアになり、take (the business) over, turn (the stove) on のような [動詞... 小辞] の形をとることが一般に可能である。しかし、(40) のタイプの denom-V は首尾一貫してこの形を取ることはできない。(40) の事実は、denom-V が (39) の LRS 表示をもつと仮定すると、(41) のように主要部移動制約により説明が可能となる。

(2.41)



(41) の派生において shelf は内部 VP の主要部への移動の際前置詞 on を飛び越えておりこの派生は主要部移動制約の違反となる。(40) は shelve のような denom-V が (39) で示すような LRS 表示を持ちその派生が統語の制約を受けるといふ分析を支持する証拠となる。

H&K(1993) では項構造における外項の位置付けについてある重要な提案を行っている。これまでの項構造の研究では、外項は内項とともに述語の項



構造を形成すると考えられていたが、彼らは外項は項構造の一部ではなく、それ故項構造の表示である LRS 表示には現れないという提案を行っている。彼らは LRS 表示のレベルを l-syntax、その後の機能範疇の導入以降のレベル (D-structure 以降) を s-syntax と便宜上区別しているが、外項は LRS 表示、つまり l-syntax ではなく s-syntax のレベルで統語表示に組み込まれ s-syntax において述語句 (例えば VP) と叙述 (predication) 関係を持つことでライセンスを受けると論じている。<sup>15</sup>

H&K は述語の項構造は上述の特性をもつ基本的 LRS に加え様態部 (manner component) を持つ必要があることを、splash 型と smear 型の二種類の「液体の動きの様態」動詞が示す他動性の交替可能性のコントラストに基づき主張している。この二つのタイプの動詞は他動性の交替可能性に関し (42-43) と (44-45) のコントラストを示す。

(2.42) *inchoative use*

- a. Mud splashed on the wall.
- b. Honey dripped on the cornbread.

(2.43) *transitive use*

- a. The pigs splashed mud on the wall.
- b. We dripped honey on the cornbread.

(2.44) *inchoative use*

- a. \*Mud smeared on the wall.
- b. \*Pipeclay daubed on their bodies.

(2.45) *transitive use*

- a. We smeared mud on the wall.
- b. They daubed pipeclay on their bodies.

---

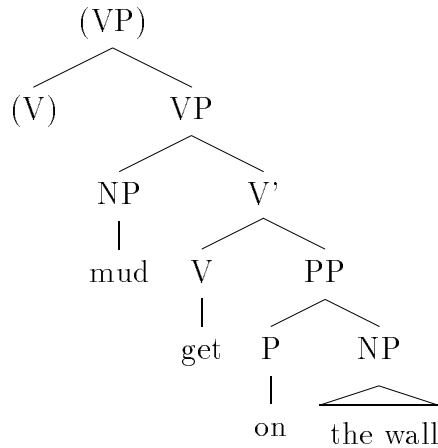
<sup>15</sup> 技術的細部はともあれ、従来の仮定とは異なり外項が項構造の一部ではないという提案は、彼らの議論以外にも、Marantz (1997) や Nishiyama (1997) でもこれを支持する興味深い経験的証拠が提出されており項構造研究の新しい方向を示すものである。

(42-45) の動詞は、どちらのタイプも基本的意味は (46) で用いられている get と平行しており、その LRS も基本的には get の LRS 表示 (47) と同じと考えられる。

(2.46)

- a. Mud got on the wall.
- b. We got mud on the wall.

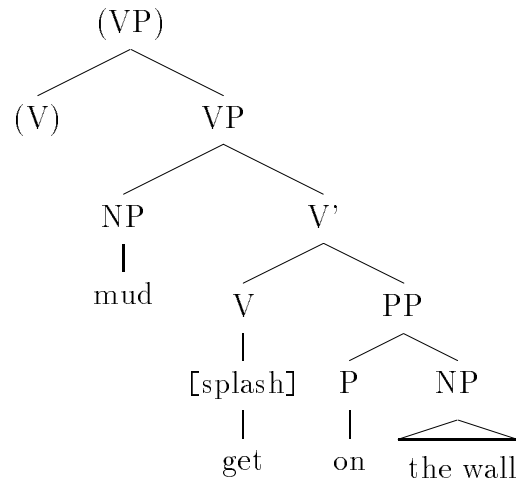
(2.47)



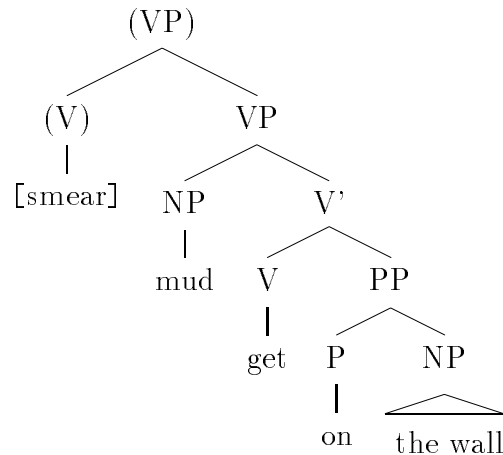
しかし、この二つのタイプの動詞は get とはその意味内容がより複雑 (complex) であるという点で異なっている。具体的にいうと、get の意味に何らかの「動きの様態」が加味されたものが splash あるいは smear タイプの動詞の意味となる。H&K は LRS 表示に様態部を仮定することでこれらの動詞の「動きの様態」の意味を記述することを提案している。彼らは、splash タイプ及び smear タイプの動詞の LRS は (47) の get の LRS に様態部を加えた (48) の表示をもつと仮定する。<sup>16</sup>

<sup>16</sup> manner component は (48a) の [splash] のように角括弧で示される。

(2.48) a.



b.



彼らは様態部が項構造レベルに必要な概念であることを (42-45) の他動性の交替現象のコントラストを経験的証拠として用い議論している。smear タイプの動詞と splash タイプの動詞の基本的 LRS は (48a, b) で示すように同じであるが、(42) と (44) のコントラストが示すように smear タイプの場合は splash タイプと異なり自動詞構文では現れない。H&K はこの splash タイプのと smear タイプの動詞の他動性の交替についてのコントラストは、(48) のそれぞれの動詞の LRS 表示の様態部内の要素の修飾パターンの特性の違いから説明が可能となると主張する。splash の場合は様態部は LRS 表示の中の内項 (inner VP の SPEC 位置の NP) の動きの様態を修飾するという意味で内項指向 (internal in orientation) である。一方 smear の場合その様態部は動作主名詞句の動きを修飾するという意味で外項指向である。splash の場合は様態部はその LRS 内部で VP-SPEC 位置の内項と結びつくことで l-syntax

のレベルで適切に修飾関係が決まる。それゆえ、s-syntax のレベルでの外項の導入は様態部をライセンスするためには必要なく、その存在は随意的となり結果的に inchoative-transitive の交替現象が見られることになる。<sup>17</sup> 一方、smear の様態部は動作主の動作の様態を述べる。このため、LRS の基本構造に関しては smear は splash と同じだが、smear の場合はこの様態部の特性により s-syntax で外項が現れることが要求される（外項が無ければ様態部がライセンスを受けられず完全解釈の原理の違反となる）。そのため、smear タイプの動詞には常に外項が現れ、義務的に他動詞構文となるのである。(42-45) で観察された splash タイプと smear タイプの動詞の他動性交替についてのコントラストは様態部を含む LRS の分析を仮定して初めて可能になるものであり、この現象は H&K の項構造分析を支持する経験的証拠となる。

## 2.5 run タイプ MMV の非対格性の交替現象再考

この節では 4 節で見た H&K(1993) において提案されている項構造分析の枠組みを用い、3 節で見てきた run タイプ MMV の非対格性の交替現象を考察する。

この現象の分析に入る前に、様態部を含む LRS の内部構造について考える。H&K は LRS の様態部を (48) が示すように V 節点へのタグ (tag) と表示しているが、この仮定はあくまで暫定的なものであり適切な表示がどのようなものでどういうプロセスで形成されるかについては今後の問題と述べている。<sup>18</sup> 確かに、(48) で LRS の基本的内部構造を決めている要素である get の特性及び get と様態部との関係についてその理論上の位置付けが明らかではない。ここでは、様態部を含む LRS 表示の特性について (49) を仮定する。

(2.49)

- a. 辞書は Pesetsky (1990, 1995) の意味でのゼロ形態素 (zero morpheme) を含み、ゼロ形態素はそれ自体の項構造を持つ。
- b. ゼロ形態素は統語的プロセスにより語根 (root) と結びつく。<sup>19</sup>

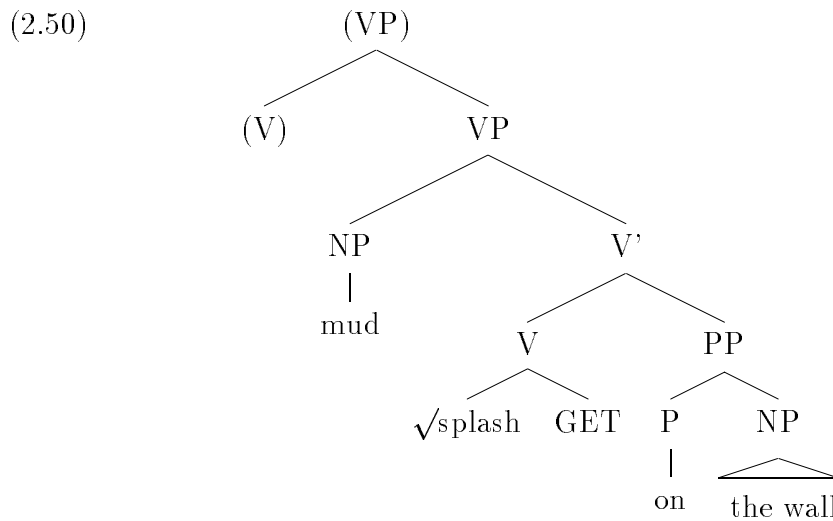
<sup>17</sup> s-syntax で外項が現れる場合は transitive、外項が導入されない場合は内項が主節主語位置に繰り上がることで inchoative の形が派生される。

<sup>18</sup> H&K(1993:90) 参照。

<sup>19</sup> 現在極小主義プログラムで仮定されている統語操作は Merge あるいは Move により組

- c. 語根+ゼロ形態素の複合体においては常にゼロ形態素がその主要部 (head) となる。<sup>20</sup>

(49) を仮定すると splash のような様態部を含むとされる動詞は形態論的には語根 (root) と接尾辞として機能するゼロ形態素が組み合わさった複合語であり、H&K の様態部の LRS での位置付けはゼロ形態素の語根と考えることができる。語根  $\sqrt{\text{splash}}$  が結びつくゼロ形態素を GET と表示すると LRS は (50) の表示となる。<sup>21</sup>



(49) の仮定から (50) の LRS 表示において splash の基本的 LRS を決定しているのはゼロ形態素 GET であり、語根  $\sqrt{\text{splash}}$  は GET の様態を述べるいわば付加詞 (adjunct) として機能していることになる。

---

み合わされると仮定する。

<sup>20</sup> これは、Pesetsky (1990) が Myers の一般化を説明するために提案した空形態素フィルター (Empty Morpheme Filter) の背後にある仮定でもある。Pesetsky(1990: 59) 参照。

- i) Myers's generalization: Zero-derived words do not permit the affixation of further derivational morphemes.
- ii) Empty morpheme Filter:  $*[\alpha \dots [e] \dots]$  (linear order irrelevant), where (1) [e] is an immediate constituent of  $\alpha$ , and (2) [e] is not the head of  $\alpha$ .

<sup>21</sup> Pesetsky (1990, 1995) にならい語根は  $\sqrt{\text{splash}}$  のように、 $\sqrt{\quad}$  を付けて示す。

H&K の項構造分析を (49) の方向でとらえ直し、3 節で見た run タイプ MMV の非対格性の交替現象を考える。run タイプ MMV の非対格性交替現象で説明すべき特性は (51) とまとめられる。

(2.51)

1. 補部の意味が場所変化の時に限り非対格への交替が起こり、状態変化では非対格への交替は起こらない。(52a, b)
2. 非対格用法の場合は必ず場所変化の表現が補部に現れる。(52c, d)
3. この交替を示すのはは run タイプ MMV を初めとするいくつかの動詞のクラスに限られる。<sup>22</sup> (52e,f)

(2.52)

- a. John ran clear of the car.
- b. \*John ran exhausted.
- c. We ran the mouse through the maze.
- d. \*We ran the mouse.
- e. John ran out of the room.
- f. \*John laughed out of the room.

run タイプ MMV の非対格性の交替は、語彙従属 (lexical subordination) による分析に見られるように、run タイプ MMV は本来的には非能格の特性を持つがある条件下で意味変化が起こり非対格へ変化するという考えが一般的である。ここでは (49) を組み込んだ H&K 流の項構造分析を仮定し、どちらの用法の run タイプ MMV も語根  $\sqrt{\text{run}}$  とゼロ形態素の複合体であるという分析を提案する。(49c) から動詞の非対格性を決めるのは語根でなく主要部のゼロ形態素である。そうすると、run の本来的性質が非能格で非対格用法が派生的ものと考えerのではなく、 $\sqrt{\text{run}}$  が生起する基本的 LRS として非能格・非対格の両方があり、どちらの環境に現れるかで非対格性が決まると考えるのが自然である。以下では、この観点から run タイプ MMV のそれぞれの用法の LRS 表示を考える。スペースの都合上、非能格用法の run タイプ

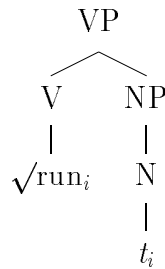
---

<sup>22</sup> 注 13 参照

MMV は H&K の分析をごく簡単に紹介するにとどめ、非対格用法の LRS 表示について詳しく論じていく。

まず非能格動詞の LRS 表示について H&K の分析を見ていく。H&K は非能格動詞は denom-V でその LRS は、(39) と同様名詞編入 (noun incorporation) により派生する仮定している。彼らの分析が正しいと仮定すると、非能格用法の run タイプ MMV は (53) の LRS をもつことになる。<sup>23</sup>

(2.53)



run の非能格用法の LRS 表示に関しては名詞句内の語根の構造上の位置や名詞編入先の V の特性等考えなくてはならない問題がいくつかあるが、ここでは彼らの分析をそのまま仮定することにして非対格用法の LRS 表示について議論に移る。

非対格用法の run タイプ MMV は splash 型の動詞と同様、様態部として機能する語根とあるタイプのゼロ形態素との複合体である仮定することで、(51) の一連の現象の説明を試みる。run タイプ MMV の LRS に関し (54) を提案する。

(2.54) 英語の辞書は運動の方向を表すゼロ形態素動詞 GO をもち、語根  $\sqrt{\text{run}}$  が l-syntax で GO と複合体を形成する。

(54) を仮定する動機の一つとして、日本語の run タイプ MMV が非対格用法で用いられる場合、方向の表現を伴い形態的に複合動詞となる事実がある。まず、(55) を見てみよう。<sup>24</sup>

<sup>23</sup> H&K では、非対格動詞は denom-V と分析されているが、Marantz(1997) が主張するように語根自体は、範疇に関しては中立の可能性もある。

<sup>24</sup> 影山 (1993: 169) が述べるように、テ形を含む複雑述語 (「書いている」等) は形態的に一語の複合動詞とはなっていない可能性もある。

(2.55)

- a. 子供たちが広場で走った。
- b. 子供たちが公園へ走っていった。
- c. ?\* 子供たちが公園へ走った。
- d. \*子供たちが広場で走っていった。

「走る」は方向の表現と共に起する場合興味深い特性を示す。「走る」は(55c)のように単独では方向の表現を取ることができず、(55b)のように「走っていく」と複合動詞となる必要がある。また複合動詞として用いられる場合、(55b)と(55d)のコントラストが示すように常に方向の表現を伴わなくてはいいない。「走る」が(55a)のように動作の様態を示す場合と方向の表現を伴い「走っていく」と複合動詞となる(55b)の場合で、(56)で示すように英語と同様の非対格性の交替現象が見られる。

(2.56)

- a. \*子供たちが<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> 手をつないで広場で3人<sub>i</sub> 走った]
- b. 子供たちが<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> 手をつないで公園へ3人<sub>i</sub> 走っていった]
- c. \*学生たちが<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> プールで5人<sub>i</sub> 泳いだ]
- d. 学生たちが<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> 向こう岸まで5人<sub>i</sub> 泳いでいった]

「～人」や「～個」のような助数詞を伴う表現 (numeral quantifier, 以下NQと略記) は英語の遊離数量詞 (floating quantifier) と同様に、それが修飾する名詞句とある局所的関係を持たねばならないという性質を持つ。<sup>25</sup> この局所性の条件のため、NQがVP内にある場合、(57)が示すようにVP内の名詞句とは結びつくことできるが主語名詞句は修飾できないという主語・目的語の非対称性 (subject-object asymmetry) を示す。

(2.57)

- a. \*子供たちが<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> みかんを3人<sub>i</sub> 食べた]
- b. 子供たちが [<sub>VP</sub> みかんを<sub>i</sub> 3個<sub>i</sub> 食べた]

<sup>25</sup> Miyagawa (1989)、Ueda (1986) 等を参照。この局所性の条件は、例えばMiyagawa (1989) では相互的c統御関係と規定されている。



NQのこの性質を利用して(56)の動詞の非対格性をテストすることができる。例えば、(56a)ではVP内部の「3人」は「子供たち」を修飾できない。これは「子供たち」がどのレベルでもVP内にはない、即ち主語位置にあることを意味している。一方、(56b)ではVP内の「3人」は「子供たち」と結びつく解釈が可能である。これは、(56b)の表層主語「子供たち」は基底では主語位置ではなくVP内にあることを示している。つまり、日本語のrunタイプMMVは、「走る」のように単独で用いられる場合は非能格動詞であるが、「いく」と複合体を形成すると非対格の性質を持つことが(56)から分かる。<sup>26</sup>

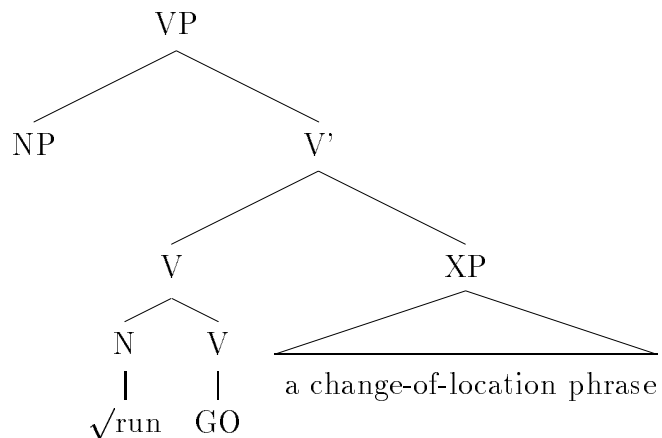
日本語のrunタイプMMVは方向の表現を伴って常に非対格の特性を示すという点で英語の場合と平行している。日本語の場合の特徴は、このタイプの動詞は「いく」と複合語を形成して初めて非対格の特性を持つという点である。「いく」は単独の動詞として用いられる場合は、通常方向の副詞句をとり非対格動詞の振る舞いを示す。それ故、「走っていく」という複合動詞の非対格の性質は「いく」の特性に由来すると考えるのが自然である。こう考えると、(54)の仮定のように英語のrunタイプMMVの非対格用法の場合も、英語には日本語の「いく」に相当する音形をもたない形態素が存在し、runタイプMMVは語根 $\sqrt{\text{run}}$ がこの形態素と複合体を形成したときに非対格の性質をもつと考えるのはそうおかしなことではない。また、こう仮定することで上で見た両言語の非対格性の交替現象に統一的説明を与える可能性がでてくる。日本語との類推から(54)を仮定し(51)の英語のrunタイプMMVの性質を考える。(54)を仮定すると、runタイプMMVは(58)のLRS表示を持つことになる。<sup>27</sup>

---

<sup>26</sup> 日本語のrunタイプMMVの非対格性の交替現象はTsujimura(1994)が詳しく論じている。

<sup>27</sup> runは非能格の場合と同様非対格の場合もdenom-Vと仮定する。

(2.58)

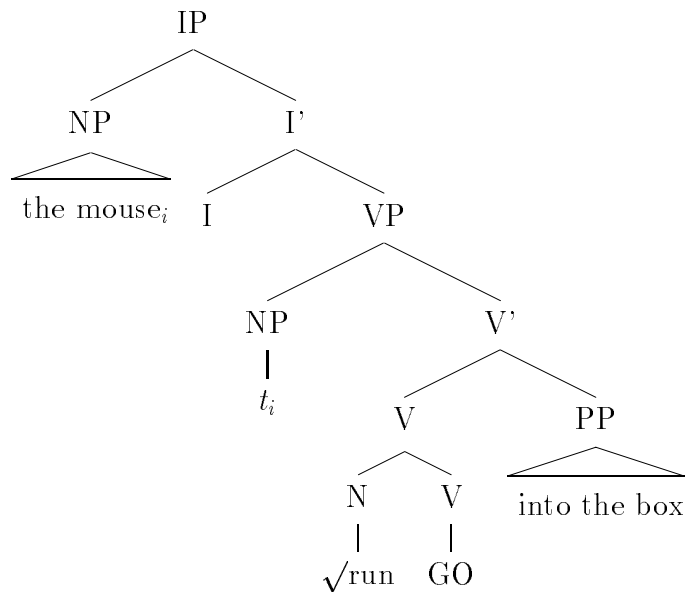


l-syntax が (58) の LRS 表示で終わる場合は、s-syntax での VP-SPEC 位置の NP の主節主語への移動により (59a) が派生され、(58) が l-syntax で更に V に選択されより上位の VP へと投射されると s-syntax で外項が現れ (59b) の使役形が派生される。

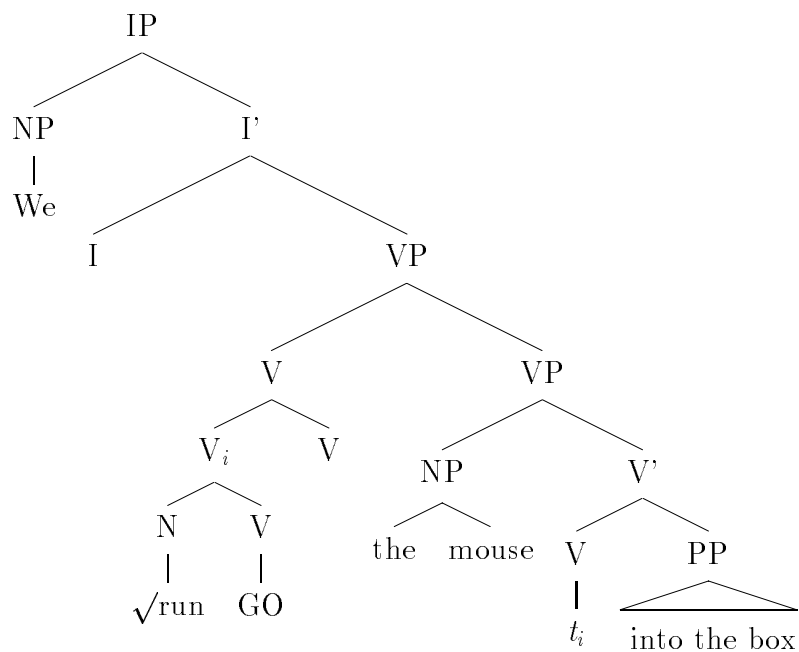
(2.59)

- a. The mouse ran into the box.
- b. We ran the mouse into the box.

(2.60) a.



b.



非対格 run タイプ MMV は (58) で示すように、語根 (例えば  $\sqrt{\text{run}}$ ) とゼロ形態素 GO との複合体であるが、(49c) のゼロ形態素に関する一般的仮定からこの動詞の主要部は GO の方であり、それ故その項構造あるいは非対格性も GO の特性により決まる。ゼロ形態素を仮定する利点は、(51) 及び (52) で示されている一見無関係に見える非対格 run タイプ MMV の振る舞いがゼロ形態素 GO の特性に還元できるという点である。ゼロ形態素が (61) の性質を持つと仮定して、(52) の現象を見ていく。

(2.61)

- a. GO はその補部として場所変化の表現のみを選択する。
- b. GO の場所変化の要素の選択は義務的である。
- c. GO はその選択特性としてある意味範疇の語根とのみ複合体を形成する。

(52a, b) のコントラストは非対格 run の LRS の主要部である GO の補部選択の特性 (61a) から帰結する。run タイプ MMV は (58) のように GO との複合体を形成して初めて非対格の特性を持つ。複合動詞主要部の GO がとる

のは場所変化の要素のみであり、状態変化や単なる場所表現とは共起しないため (52b) が不適格となる。非能格 run タイプ MMV の LRS にはもちろん GO は存在せず、当然 (61a) の補部の選択制限もないため、John ran himself exhausted のように状態変化の表現が補部に生起できる。

(52c,d) は run タイプ MMV が使役的に用いられる場合は常に場所変化の表現を伴う必要があることを示している。上述のように、使役的に用いられるのは自動詞は非対格動詞に限られる。run タイプ MMV が非対格の特性を持つためには GO と複合体を形成する必要がある。GO が (61b) の選択特性をもつと仮定することで、何故 run タイプ MMV が使役動詞として用いられる場合に場所変化表現が義務的かを GO の特性に還元して説明ができる。

(58e,f) については、(61c) を仮定することで各動詞についてそれが run タイプ MMV 特有の非対格性の交替を示すかどうかを述べる必要はなくなる。ゼロ形態素 GO がどのような意味範疇の要素と複合体を形成するかを、GO の選択特性として述べることで (52e,f) を区別することができる。

## 2.6 ゼロ形態素について

前節で H&K の LRS 表示が Pesetsky(1990, 1995) の意味でのゼロ形態素を含むと仮定し動作の様態動詞の非対格性の交替現象を考察してきた。この節では、まず Pesetsky が提示しているゼロ形態素の存在を支持する経験的証拠を見ていく。次に、前節の「動作の様態動詞」の分析で仮定したゼロ形態素が Pesetsky が仮定しているものとその性質が異なることを示唆する経験的証拠を提示し、この現象に基づきゼロ形態素の分析を再考する。

Pesetsky は (62) のような grow 等の非対格動詞が示す使役交替 (あるいは他動性交替) 現象にゼロ形態素 CAUS が関与していると主張している。

(2.62)

- a. Tomatoes grow.
- b. Bill grows tomatoes. (grow=  $\sqrt{\text{grow-CAUS}}$ )

具体的に言うと、grow の他動詞用法は自動詞用法とは異なり、語根  $\sqrt{\text{grow}}$  が統語においてゼロ形態素 CAUS と結びついた複合体と分析されるという提

案である。<sup>28</sup> ゼロ形態素 CAUS の存在を支持する証拠として Pesetsky はこのタイプの動詞の名詞化の可能性についての事実、(63) を提示している。

(2.63)

- a. the growth of tomatoes
- b. \*Bill's growth of tomatoes.  
cf. Bill's cultivation of tomatoes
- c. the drop of the curtain
- d. \*the mechanism's drop of the curtain
- e. the swing of the pendulum
- f. \*gravity's swing of the pendulum (Pesetsky 1995:80)

使役交替現象を示す動詞の名詞化は、自動詞形については (63a,c,e) のように可能だが、(63b,d,f) が示すように他動詞の場合は不可能である。Pesetsky は (63) の名詞化の可能性についてのコントラストは、ゼロ形態素 CAUS を仮定すれば Myers (1984) がゼロ派生語について独立に示した一般化 (64) の事例と考え説明できると述べている。

(2.64) Myers の一般化

ゼロ派生語に派生形態素を接辞として付けることはできない。

Myers の一般化に照らし (63) の事実をみていく。自動詞の名詞化は語根に直接名詞接辞 (-*th*, -*ment*, - $\phi_{nom}$  等) が付与され形成されるが、他動詞用法の名詞化では、ゼロ形態素分析を仮定した場合、名詞接辞が付与される対象は [語根- CAUS] (例えば [grow-CAUS]) である。このように、他動詞の grow が内部にゼロ形態素 CAUS を含むゼロ派生語と仮定すると、(63b,d,f) で名詞化が不可能な現象は (64) の一般化の事例の一つと見なすことができる。(64)

---

<sup>28</sup> H&K では、非対格動詞使役形は l-syntax のレベルで自動詞形の LRS の主要部が上位の動詞主要部へ付加することで派生すると分析している。ゼロ形態素の仮定、使役形派生のレベル (l-syntax か s-syntax か) において、Pesetsky と H&K は異なっているが、非対格動詞の使役交替に統語プロセスが関わっていると分析している点で、基本的に同じ統語的アプローチである。

にどのような文法の原理が関わっているかは定かではないが、Pesetsky の使役形の派生が統語レベルで行われるという分析が正しいとすると、(64) が示すゼロ形態素のライセンスには何らかの統語の原理が関わっていることになる。<sup>29</sup>

次に、動作の様態動詞の名詞化現象を見ていく。前節で run タイプ MMV の非対格用法は語根とゼロ形態素 GO の複合体であると論じた。しかし、(63) の使役形の場合とは異なり、この場合はゼロ形態素を含む複合動詞の名詞化が可能なのである。

(2.65)

- a. John's run to the station
- b. Mary's walk to the window
- c. ??Sam's dance to the window

(65) は「行為の名詞」の解釈において全て容認可能である。非対格用法の run は  $[_V \sqrt{\text{run-GO}}]$  のようにゼロ形態素が主要部の複合体であるが、CAUS が主要部の場合と異なり名詞接辞（この場合名詞接辞もゼロ接辞）を付加し  $[_{Nom}[_V \sqrt{\text{run-GO}}]-\phi]$  の形が可能である。このため、(65) の名詞化は Myers の一般化には収まらない現象である。<sup>30</sup> 非対格 run タイプ MMV の使役用法は、他の非対格動詞の他動詞用法同様、名詞化が不可能のようである。

(2.66)

- a. ??John's run of the mouth through the maze
- b. \*John's walk of the dog to the park

---

<sup>29</sup> Myers の一般化がどのような文法の原理から帰結するかは現時点では明らかではない。Pesetsky (1990:59) では、この一般化が Baker(1988) 等で述べられている主要部の連続循環的移動を禁じる原則と同じ性質を持つことに着目し、空形態素フィルター（注 20 参照）を仮定し説明している。また、Pesetsky(1995:83) ではこの一般化を Fabb(1988) の接辞研究の方向で説明を試みている。

<sup>30</sup> 非対格 run タイプ MMV の使役用法はゼロ形態素 GO にさらに CAUS が付加された  $[_V[_V \text{run-GO}]-\text{CAUS}]$  である。この使役化のケースも、名詞化の場合と同様 Myers の一般化と矛盾する現象である。

Myers の一般化に関する (65) と (63) の違いが何に帰因するか現時点では明らかではないが、ここで二つの可能性を示しておく。一つは、ゼロ形態素が l-syntax で LRS 表示に組み込まれる場合と s-syntax で統語構造に導入される場合を区別することである。使役のゼロ形態素 CAUS は Pesetsky の分析のとおり s-syntax で統語表示に組み込まれるが、一方 GO は l-syntax で LRS で語根と組み合わせされると仮定する。更に、s-syntax には l-syntax の内部表示 (LRS) が見えないと仮定すると、s-syntax レベルの表示に存在するのは CAUS のみで GO は統語 (s-syntax) では「見えない」。Myers の一般化の背後にある原理は統語の原理 (恐らく PF 表示の条件) であるので、この原理は CAUS には適応するが GO は「見えず」、その結果 (63) と (65) のコントラストが生まれる。

もう一つの可能性は、ゼロ形態素には AGR 等の機能範疇と同様に「強形」(strong) と「弱形」(weak) があると仮定することである。機能範疇との類推で、「強形」のゼロ形態素は PF 表示で Myers の一般化で禁じられている環境で現れると完全解釈の原理の違反となるが、「弱形」のゼロ形態素は PF レベルでは「見えず」、完全解釈の原理の適用を免れるとする。その上で、CAUS は「強形」で GO は「弱形」とすることで (63) と (65) の名詞化の可能性を区別できる。

## 2.7 おわりに

この章では様態の動作を示す動詞のタイプである run タイプの動詞の非対格性の交替現象を H&K の項構造分析の枠組みで考察した。2 節では結果の述語構文のこれまでの研究を概観し、非能格・非対格動詞に典型的な結果の述語構文の特性をみた。3 節では、非能格動詞と分類されている run タイプ MMV が典型的に非対格動詞の結果の述語構文のパラダイムを示すという L&RH の観察及び彼女らの分析を紹介した。4 節で H&K の項構造の分析についての提案を紹介し、5 節で彼らの枠組みで L&RH の観察の説明を試みた。H&K の項構造分析に Pesetsky (1990, 1995) の意味でのゼロ形態素を組み込むことで、L&RH の指摘した run タイプ MMV の非対格性の交替現象が説明されることを議論した。最後の節ではゼロ形態素に二つのタイプを仮定する可能性を述べた。

## 参考文献

- Baker, M.(1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. University of Chicago Press, Chicago, Ill.
- Bresnan, J.(1994) “Locative inversion and the Architecture of universal Grammar.” *Language* 70, 72-131.
- Burzio, L.(1986) *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*. Dordrecht, Ridel.
- Carrier, J. and J. H. Randall (1992) “The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives.” *Linguistic Inquiry* 23, 173-234.
- Chomsky, N.(1992) “A Minimalist Program for Linguistic Theory”. *MIT Occasional Papers in Linguistics* 1, MIT, Cambridge, Mass.
- Fukuda, K.(1990) “The Unaccusativity of Locomotion Verbs.” 『北海道英語英文学』第35号、63-72、日本英文学会北海道支部.
- Goldberg, A. E. (1991) “A Semantic Account of Resultatives.” *Linguistic Analysis* 21, 66-96.
- Goldberg, A. E.(1994) “Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure.” University of Chicago Press, Chicago, Ill.
- Grimshaw, J.(1987) “Unaccusatives - An Overview.” *NELS* 17, 244-59.
- Halliday, M. A. K.(1967) “Notes on Transitivity and Theme in English Part I.” *Journal of Linguistics* 3, 37-81.
- Hale, K. and S. J. Keyser (1993) “On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations,” in *The View from Building 20* edited by K. Hale and S. J. Keyser, MIT Press.



- Hoekstra, T.(1988) "Small Clause Results." *Lingua* 74, 101-39.
- Hoekstra, T.(1992) "Aspect and Theta Theory." In Roca (1992), 145-74.
- Hoekstra, T. and R. Mulder (1990) "Unergatives as Copular Verbs; Location and Existential Predication." *The Linguistic Review* 7, 1-79.
- Jackendoff, R. S.(1990) *Semantic Structure*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Jackendoff, R. S. "Babe Ruth Homered His Way into the Hearts of America." In Stowell and Werhli (1992), 155-178.
- Kageyama, T. (1993) *Bunpou to Gokeisei* (Grammar and Word Formation), Hituji Shobou.
- Levin, B.(1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. University of Chicago Press, Chicago, Ill.
- Levin, B. and T. Rappoport (1988) "Lexical Subordination." *CLS* 24, 275-89.
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav (1989) "An Approach to Unaccusative Mismatches." *NELS* 19, 314-28.
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav (1992) "The Lexical Semantics of Verbs of Motion: The Perspective from Unaccusativity." In Roca (1992), 247-69.
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Marantz, A. P.(1992) "The Way Construction and the Semantics of Direct Arguments in English." In Stowell and Werhli (1992), 179-88.
- Marantz, A. P (1997) "Not Escape from Syntax: Don't try Morphological Analysis in the Privacy of Your Own Lexicon," ms. MIT.
- Milsark, G. (1974) *Existential Sentences in English*. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- Nishiyama, K. (1997) "V-V Compounds as Serialization," ms., Cornell University.
- Perlumutter, D. M.(1978) "Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis." *BLS* 4, 157-89.

- Pesetsky, D.(1990) "Experiencer Predicates and Universal Alignment Principles," ms. MIT.
- Pesetsky, D.(1995) *Zero Syntax: Experiencers and Cascades*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Rizzi, L. (1990) *Relativized Minimality*. MIT Press.
- Roca, I. M.(1992) *Thematic Structures: Its Role in Grammar*. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Rothstein, S.(1983) *The Syntactic Form of Predication*. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- Rothstein, S. (1992) "Case and NP Licensing." *Natural Language and Linguistic Theory* 10, 119-39.
- Stowell, T. and E. Werhli (1992) *Syntax and Semantics 26: Syntax and the Lexicon*. Academic Press, San Diego, Calif.
- Tenny, C.(1987) *Grammaticalizing Aspect and Affectedness*. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- Travis, L. (1984) *Parameters and the Effects of Word Order Variation*. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- Ueda, M. (1986) "On Quantifier Float in Japanese," University of Massachusetts Occasional Papers in Linguistics 11.
- Van Valin, R. D. Jr. (1987) "The Unaccusative Hypothesis vs. Lexical Semantics: Syntax vs. Semantic Approaches to Verb Classification." *NELS* 17, 641-661.
- Vendler, A. (1967) *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.
- Yamada, Y. (1987) "Two Types of Resultative Construction." *English Linguistics* 4.